

にて富士山の圖を板行に彫りて、埒もなく押し立てあるを、蘭人往來する時、何枚も需むる事なり、さて此山は神代の以前より焼出し、數千年を経て、四面に砂を吹きふらし、如此かたちとはなりぬ、我壯年の時までは、頂より煙立ちけるが、今は煙なし、山嶽は皆世界の不開前の物にて、波濤の形あり、此富士のみ、出現の山なり、遠く望むべし、山には登るべからず、天の逆錡の如き、埒もなき物よりは、此富士を稱歎すべし、夫故予も此山を摸寫し、其數多し、蘭法蠟油の具を以て彩色する故に、髣髴として山の谷々、雪の消え残る處、或は雲を吐き、日輪雪を照し、銀の如く少しく似たり、吾國畫家あり、土佐家狩野家、近來唐畫家あり、此富士を寫す事をしらず、探幽富士の畫多し、少しも富士に似ず、唯筆意筆勢を以てするのみ、○下略

〔老の長咄〕三國に秀し富士の御山拜せん事をとて、能登の七尾の俳士笑鴉といへる老人、夏比行脚なして、不二の根かたにいたる、其地のものども登山をす、むれども、さらなき、いれずして、たゞ富士の根方を、十餘日の日數をへつくして、めぐりおほせ、またその地へ來たりて、い入るには、あら尊とや有がたや、その日く、の景色同じからずして、中々こと葉には、述がたしと、なみだをこぼして語りしとかや、殊勝なる俳人なり、ゆへありて、きくに、富士の大宮司は、千四百石の御朱印たり、此神主一度も登山せず、たゞ、籠より拜し奉ると、なん、かけまくも、この花さくや、ひめの御神にて、ましませば、はるかに拜し敬ひ奉ること、有がたけれ、むかしより、ことわざに、登りてよければ、西行が登るといひしも、むべなりけらし、

〔嘉永明治年間録〕九萬延元申年八月廿二日 英人富士山ヲ測量スルニ就キ、大宮司ヨリ届書、此日寺社奉行松平伯耆守へ富士大宮司届書寫

英國人不士山登山、去る七月十八日出立、廿三日大宮泊の先觸に候處、廿二日大雨にて、廿四日晝立、大宮小休、村山泊に相成り、廿五日快晴致し、不士山六合目へ泊り、廿六日快晴頂上いたし、其日